

「ベルクソンと分析哲学の対話」

アンリ・ベルクソン(1859-1941)が 20 世紀フランスにおける最も偉大な哲学者の一人であり、彼の著作が哲学的古典として立場を有しつつあることは論を俟たないだろう。ベルクソン自身が扱った問題群は、認識論や時間論、心身問題、道徳論、生命論といった伝統的な哲学の中心的問題と言ってよいものであるが、「持続」や「イマージュ」といった独自の概念や、当時の生物学・生理学・心理学など他分野の知見が組み込まれていることもあり、ややもすれば近づきがたい印象もあったと言える。

しかしながら、近年では、知覚論、記憶論、時間論（形而上学、時間意識）、汎心論、行為者因果や自由論といった様々なトピックを巡って、ベルクソン哲学を現代の分析哲学や神経科学などの議論と突き合わせることで、その哲学的射程を掘り下げ、現代的意義を解明するとともに、新たな哲学的議論を打ち立てる野心的なプロジェクトに多くの日本の研究者も参画している。また、B. デイントンや K. マイケリアンといった現代の分析哲学者も、記憶の哲学や時間論を論じるにあたって、生理学や心理学、物理学と並んでベルクソンの議論に関心を示しており、両者の対話は着実に進みつつある。

本テーマレクチャーでは、ベルクソン研究の側から彼の哲学が有するインパクトや現代的意義を紹介していただき、それに対して、分析哲学をはじめとする同様の主題を扱う他の哲学的潮流からのリプライを交えて議論することで、いわゆる大陸哲学と分析哲学の間にどのような対話が可能か、あるいは哲学史研究と哲学研究のより良い協同とはないか、といった問題にも光を当てる機会としたい。